異文化理解と季節感

—— 俳句を教材にした日本事情の授業 ——

友岡 純子

<要旨>

日本語に限らず一つの言葉は表面的な語義の背後に内包的意味を持っているが、第二言語習得においてはどのように扱うべきなのであろうか。表面的な語義の理解だけでは本当の意味で言語を習得したことにはならない。言葉の背後に広がるイメージの理解を通して異文化を理解することを目的に、俳句を教材にした日本事情の授業を試みた。本稿は、俳句の季語が持つ季節感のアンケート調査の結果から、日本人と外国人のイメージのずれを明らかにし、そのずれを埋めるべく試みた授業の実践報告である。

<キーワード>

異文化理解 俳句 季語 季節感 日本人の美意識

1、言葉の内包的意味と日本語教育

多義語に限らず、言葉の意味というものは本来多重性を持つものである。例えば「雨」という言葉を考えてみよう。表面的な語義としては、大気中の水蒸気が気温の低下によって水滴となって地上に落ちてくるといった気象現象のことである。この一義的な意味については、雨を体験したことのある人ならばどの国の人でも共通の認識を得ることができよう。しかし、その一義的な意味の下に広がるイメージの世界、言わば「言葉の響き」は千差万別である。一年にほんのわずかな雨しか降らない様な国に住む人が、「雨」という言葉を聞いて感じる感じ方と、大雨による洪水に苦しむ国に住む人の感じ方とは当然違ってくるであろう。また、国や地域の共通の認識としてのイメージの違いのほかに、その言葉を使う一人一人の個人のレベルの感じ方の違いはそれこそ使う人の数だけ存在することになる。

では、このような言葉の内包的な意味は、どこまで日本語教育の問題になるのであろうか。一義的な意味さえ理解できれば、「響き」だの「イメージ」だのととらえどころのない意味については考える必要もない、と言う人もいよう。しかし、こうした「響き」や「イメージ」がその言語を話す人々の共通の認識を反映し、文化的特徴の一端を示すとすれば、それを教育の現場から外すこと

はできないのではないだろうか。

実際、日本語にはこの「響き」や「イメージ」を積極的に利用した文学が存在する。日本人が古代より育んできた短歌とそれから派生した俳句である。短歌における枕詞や懸詞、序詞などは、表面上の歌意の裏に別の歌意を成立させるほどの力を持っているし、俳句の季語もその季節感抜きには句意は成立しない。言ってみれば、俳句は日本人の季節感の表出でもある。そして、大事なことは、季語は個人的な感覚を表したのではなく、歴史的に日本人一般の美意識として成立したものであるということである。季語の中には、単に俳句の中に使われているだけでなく、日常生活の中でも頻繁に使われている言葉がある。

「日本語教育のための基本語彙調査」（国立国語研究所・1984）の中の基本6000語の中にも入っているが、こうした言葉は季語としてではなく日常語彙として使われる場合でも、使っている人が意識しているいなくにかかわらず、季節感というイメージを内包しているのである。

日本語を学習し、そのことを通して日本の文化を理解しようとする外国人留学生が、このような語彙をどのようなイメージと共に理解しているのか、日本人の持つイメージとはどう違うのか、明らかにする必要がある。私は今回、日本人と外国人の学生に季語と季節感のアンケートを実施した。以下はそのアンケート調査の結果とそれについての考察である。

2、季節感アンケート 調査集計結果および考察

(1)アンケートの概要

①実施時期 1993年11月

②調査対象 日本人女子学生22名

- 俳句を専門的に学習したことのない者。
- 年齢は20代～30代。

外国人女子学生22名。

- 年齢は20代。
- 滞日1年以内。
- 日本語能力は中上級以上。
- 国籍の内訳は、台湾3、中国8、韓国3、タイ3、インドネシア1、アルゼンチン1、メキシコ1、オーストラリア1、ドイツ1。

③調査方法 「季寄せ」（山本健吉編、文芸春秋社）より、日常語彙に近い季語40語を選び、言葉を聞いたとき思い浮かぶ季節を選ばせる。ただし特定の季節を限定できない場合は？欄に印をつける。

(2)集計結果

	語	春	夏	秋	冬	？		語	春	夏	秋	冬	？											
		日	外	日	外	日			外	日	外	日	外	日	外									
1	たまねぎ	6	2	6	5	2	8	8	3	4	2	1	花	22	17	2		1	2					
2	花野	22	11	7	2					2	2	2	夜長	1	2	6	19	2	13	1				
3	ぶらんこ	9	9	6	10	6	1	1			2	2	くらげ		1	20	13	2	5	1	2			
4	夜寒				8	8	14	14					2	4	2	19	16	1			4			
5	てんとう虫	10	7	12	15								2	5	8	1	2	5	3	11	5	1	4	4
6	木の葉		3	2		20	18				1		2	6	1	6	2	21	12	1		1	1	
7	夕焼け		1	4	14	18	3				4		2	7	6	6	15	9	1	4	1		2	
8	種まき	19	16	1	2	2	2			2	2	8	滝	1	2	14	18	4	2	3				
9	流星			14	16	3	2	5			4		2	9		10	13	6	5	6	3		1	
10	日記買う	4	10	1	2		1	17	7		2		3	0	22	10	12							
11	すいか			22	22								3	1		1	9	1	12	18	1	1	1	1
12	にじ	5	5	16	15		1			2	3	2	風邪			1	1		6	20	14	1	1	
13	さくらんぼ	10	3	11	8	1	7			4	3	3	花火			22	16	3	3					
14	月	1	1	1	5	18	13	2	1	2	3	4	もみじ				22	20					2	
15	汗			22	22								3	5	7	7	15	14	1					1
16	毛布			1	4	1	18	20					3	6	3	4	19	16						2
17	さえずり	16	13	5	5	3	1	1					3	7		1	2	2	10	19	7			3
18	ぶどう			6	10	16	9	2	1				3	8		1	22	13	5	2				1
19	鹿	4	9	4	16	3	2	3	3				3	9	6	7	12	4	1	4	2	1	1	6
20	髪洗う	4	4	15	12	1	3	1	4				4	0	8	7	5	9	3		6	1		5

備考 ●あみかけになっているのが季寄せ（歳時記）の分類した季節。
●？は季節特定不能。
●単位は「人」

(3)考察

日本人と外国人の季節感が全員一致したものは11の「すいか」と15の「汗」の二語のみである。外国人学生が全員一致して同じ季節を選んだのも、この二つだけである。それに対して、日本人全員が同じ季節を選んだものは、先の二つを含めて八つある。「花野」「すいか」「あせ」「花」「蝶」「花火」「もみじ」「風鈴」であるが、このうち「花野」は季語としては秋の草花の咲き乱れる野原であって、全員が歳時記の分類とは季節感がずれている。季語としての意味を知らなければ、「花」という言葉に引かれて春とするのは当然で、「花」は春のものというイメージの強さをかえて物語っている。また、「すいか」も歳時記から言えば秋のものなのだが、新暦の現代の季節感としては夏として当然であろう。

歳時記の分類と一致するかどうかは別の問題として、日本人は同じ風土に育ち、同じ文化的背景を背負っているので、「花」と言えば春のものという固定的イメージを持つ。夏や秋にも花は咲くのに、春しかイメージしない。しかし、外国人の場合はそれぞれの故国の風土や個人的体験から、言葉の季節をイメージするので、「花」と聞いて冬を思い起こす人もいるのである。日本人22名中、8割以上の人の季節感が一致した言葉は、40語中17語であるのに対して、外国人の8割以上が一致した語は4語に過ぎないということは注目に値する。

アンケートに用いた季語40語の中で「日本語教育のための基本語彙調査」の基本6000語に入った語は22語で、そのうち8語が基本2000語に入っている。この8語に入った「花」の意味は一義的にはflowerと同義でも、二義的には千差万別であると言うことを、日本語教師は見過ごしがちである。「花」と言えば春だという、日本人にとってはごく当たり前の感覚が、実は当たり前ではないのだということに気がつかねばならない。気象条件という自然を背景にして形成される季節感ですらこんなに違うのであるから、ましてや、歴史的・文化的な背景を持つ意味の場合はなおさらであろう。

言葉の内包的意味に現れた文化や風土の差を、日本語教師は日本語教室や日本事情の教室においてどのように扱い、異文化理解を深めていけば良いのだろうか。私はこの課題に対する一つの答えとして「異文化理解のための俳句の授業」を試みた。以下はこの授業実践の報告である。

3、異文化理解のための俳句の授業

(1)なぜ俳句を取り上げたか。

外山滋比古氏が「日本語の論理」(1973)で指摘したように、俳句は非常に「日本語的な文学」である。日本人の美意識の現れとしての季語の存在も、俳句が日本文化の本質を担う文学形式である理由であるが、それだけではない。「日本語的文学」というのは俳句の多くが名詞句だけで構成されているからである。「菜の花や月は東に日は西に」の句のように、菜の花がどんな様子なのか、月は東にどうしたのかなど、名詞句と名詞句との間の省略は読者が補って読まねばならない。これは外山氏が、表現として明示された点と点の間の空白を読み手・聞き手が補う、「点の論理」として指摘した日本語の特性そのものである。また、名詞句を構成する助詞の働きを確認する教材にもなる。俳句が有効な教材であると考えた理由は以上の通りである。

(2)教材として取り上げた句

自然風土の異なる外国人学生にも分かる句であることが第一条件である。その上で次のような観点から以下の句を教材として取り上げた。

- ①名詞句だけで構成されている句 ●菜の花や月は東に日は西に(蕪村)
 - 摩天楼より新緑のパセリほど(狩行)
- ②常識的に知っているべき句 ●古池や蛙飛び込む水の音(芭蕉)
- ③オノマトペが効果的に使われている句
 - 雪だるま星のおしゃべりぺちゃくちゃと(たかし)
- ④直喩を使った句 ●雪降り時間束の降ることく(波郷)
- ⑤破調の句 ●木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ(楸村)
- ⑥写生の句 ●囀りの高まり終わり静まりぬ(虚子)
- ⑦女性の句(対象が女子学生だから)
 - 雪はげし抱かれて息のつまりしこと(多佳子)
 - 外にも出よ触るるばかりに春の月(汀女)
- ⑧句の意味がどこの国の人にも分かりやすい句
 - 万緑の中や吾子の齒生え初むる(草田男)
 - 眠りても旅の花火の胸にひらく(林火)
 - 秋の暮れ大魚の骨を海が引く(三鬼)

以上12句のほかにもアンケートの中の季語を使った句を紹介した。教材句はすべて模造紙に毛筆で書き掲示しプリントでも配布した。

(3)授業の概要

①学習目標

- 俳句の学習を通して省略の言語としての日本語の特質を理解する。
- 名詞句を構成する助詞の働きについて理解を深める。
- 「季節感」が伝統的な日本人の美意識であることを理解する。
- 俳句の鑑賞を通して日本人の季節感を実感する。
- 母国や日本での季節感をもとに俳句を創作する。

②学習者

お茶の水女子大学に学ぶ日本語日本文化研修生、研究生など外国人女子学生

③授業日時

1993年11月25日(木) 10:40~12:10

12月 2日(木) 10:40~12:10

12月 9日(木) 10:40~12:10

④学習計画

- 第一次…季節感を表す言葉としての季語について理解する。
 - a、俳句の形式を理解し、拍感覚をつかむ。
 - b、歳時記と季語について理解する。
 - c、教師が用意した季語カードをクラスで相談しながら四季に分ける。
 - d、歳時記の分類と照らし合わせながら日本人の季節感について話合う。
- 第二次…季節感の文学としての俳句を読み、鑑賞する。
 - a、俳句の表現の特徴を知る。
 - b、俳句が省略の文学であることを理解し、切れ字の機能について知る。
 - c、古典から現代までの句を鑑賞し、季語が句の中でどのように機能しているかを理解する。
- 第三次…俳句を創作して楽しむ。
 - a、母国の風土にあった季語を探し自己流歳時記を作る。
 - b、季語を入れて俳句の創作を試みる。
 - c、句会を開く。座の文芸としての俳句の特徴を知る。
 - d、短冊に筆で自作の句を書き、作品として仕上げる。

<教案>①

11月25日木曜日 10:40~12:10 対象学生出席 11名		
<p>本時の学習目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ●俳句という文芸の概要を理解する。(形式、季語、切れ字、取り合わせなど) ●日本人の季節感について理解を深める。 		
時間	学習活動	◇留意事項 ●学生の反応
20	●「古池や蛙飛び込む水の音」の句を掲示 ①掲示されている句を例にして、俳句について知っていることを発表する。 (学生から出るものはすべて学生に説明させる。足りないところは教師が補足する。)	●俳句について学習したことのあるものは2名。 ●古池やの句はほとんどの学生が知っていた。 ●5・7・5、季語、芭蕉、などを学生が出し、切れ字は教師が補足。
15	②「古池や…」の句が描く情景を想像し、発表する。 季節はいつなのかによって情景が変わってくることを確認した上で、この句の季節を考える。	◇春の情景としてとらえられているかどうか。 蛙=春のイメージ=春の季語 ●夏の情景を想像していた学生がほとんどであった。
15	③季語の役割について考える。 季節ではなく季節感を表す。	◇17音の制約の中でのイメージの拡大が季語の役割。 ◇歴史の中で形成された美意識であり、個人的なものではないことを示す。
20	④歳時記の季語を自分の季感で分類してみる。日本人の8割以上が一致した季語16語のカードを黒板上で動かし、四季に分類する。意見が分かれる場合は、話し合っで一応統一した分類をする。	◇季語アンケートを実施。 ◇事前に日本人学生にも同じ季語の語群を分類してもらい、比較資料とする。 ◇季語カードの季語はアンケートと同じ40の季語。
19	⑤歳時記の分類と照らし合わせてみて、季節感のずれている季語を取り出す。 取り出した季語を使った句をいくつか鑑賞して季節感を確認する。	●季語16語のうち ずれたもの — 夜長 日記買う 風邪
1	⑥次時の予告 — プリント配布。	●学生が司会し話し合った。

<教案> ②

12月 2日木曜日 10:40~12:10 対象学生出席 16名		
<p>本時の学習目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 俳句の表現の特徴を理解する。(省略、体言中心、助詞の働き、切れ字など) ● 古典から現代までの句を鑑賞する。 		
時間	学習活動	◇留意事項 ●学生の反応
20	<p>①「摩天楼」という言葉から次の言葉を想像する。 (ヒント 高層ビルから見たもの) 学生から出たものはすべて書き出す。 「新緑」という言葉から次の言葉を想像する。 (ヒント どんな風に見えたのか。) 「摩天楼」「新緑」「パセリ」を助詞でつないでみる。 省略した部分を補ってみる。 摩天楼より(下を見ると)新緑(の木々)が(丸で)パセリほど(の大きさで見える。)</p>	<p>◇摩天楼より新緑がパセリほど 鷹羽 狩行 ●摩天楼⇒車、人、家、セントラルパーク、木 ●新緑⇒ブロッコリー、パセリ</p> <p>◇俳句は体言が中心となる文芸である。 ◇俳句は一瞬の心の動きを歌う。 ◇俳句は省略の文芸である。 ●摩天楼から/より ●新緑が/は ●パセリほど/くらい</p>
65	<p>②前時プリントで予告した句の中から自分の好きなくを選び鑑賞する。 自分の解釈や感想を発表する。</p> <p>a、菜の花や月は東に日は西に 与謝 蕪村 b、囀りの高まり終わり静まりぬ 高浜 虚子 c、雪だるま星のおしゃべりべちゃくちゃと 松本 たかし d、雪降り時間束の降ることく 石田 波郷 e、万緑の中や吾子の齒生え初むる 中村 草田男 f、木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ 加藤 楸邨 g、ねむりても旅の花火の胸にひらく 大野 林火 h、秋の暮れ大魚の骨を海が引く 西東 三鬼 i、雪はげし抱かれて息のつまりしこと 橋本 多佳子 j、外にも出よ触るるばかりに春の月 中村 汀女</p>	<p>◇教師は補足訂正をしながら、俳句表現の特徴についてふれ、次時の創作への手がかりを作る。</p> <p>◇切れ字の活用 ● a⇒菜の花はドイツでは晩夏 ◇客観写生 ● b⇒当たり前という ◇一句一章 印象。 ◇オノマトペ ● c⇒わかりやすかった。学生の人気は一番。 ◇直喩 ● d⇒「時間の束」が難解 ◇二句一章 ● e⇒「成長の喜び」という言葉がすぐ出る。共感を得た。 ● f⇒「急ぐな」自分への言葉とも解釈できて共感。 ● g⇒わかりやすい。 ● h⇒「海が引く」がわかりにくかった。易しいようで難しい。 ● i⇒激しい恋の思い出に共感 ● j⇒「春の月」のおぼろな感じがつかみにくいようだった。</p>
5	<p>③次時の予告 (できるだけ俳句を作ってみるよう指示する。)</p>	

<教案> ③

12月 9日木曜日 10:40~12:10 対象学生出席 11名		
<p>本時の学習目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ●俳句を作ってみることにより、俳句表現の特質を理解する。 ●母国語での季語を想定して文化の違いを実感する。 		
時間	学習活動	◇留意事項 ●学生の反応
5	①各自、母国の季節に合わせて「季節感を表す言葉=季語」を書き出して発表する。	●互いに季節感のずれを実感。 ●時間を大幅にオーバー。
20	②母国の自作季語、または日本の季語を使って俳句を作る。 (できない学生にはヒントとして型を示す。)	●積極的にどんどん作る。 型を示す必要なし。
	例A ふるさとをニュースに探す夜長かな B 足早に過ぐ人ふえて冬来たる	◇型A ふるさとや —— *どんなものを見ると、どんなときに故郷がふと懐かしくなるか。 ◇型B —— 冬来たる *何を見たり聞いたりするとき、ああ、冬が来たなあと感じるか。
30	③ミニ句会を開く 短冊状の紙に自作の句を丁寧に書く。 (教師が一度集め、頭に通し番号を書き、バラバラになるようにしてから配る。)	●時間がなくなって句会ができなかった。 ◇一句、一枚。無記名。
	配られた句を読み、いいなあと思った句の番号をメモに書き、句の紙を隣の人に渡す。 順ぐりに回していき、元に戻ったら、もう一周しながらメモした番号の中からさらに三つ選ぶ。 (教師は句を集め黒板に貼り一句ずつ順に読み上げる。)	◇メモ用紙を配布。 ◇自分の句は選ばない。
	読み上げられた句を選んだ人は挙手をする。(教師はその数を黒板に書く。) また、読み上げられた句の作者は名前を名乗る。 数が多かった人を発表して教師が講評する。	◇俳号も可。
25	④自作の句を短冊に筆で書く。	◇短冊を配布。小筆と墨汁を用意する。練習用紙も配布。
10	⑤授業の感想を書く。	●一人1~2句完成。

4、授業を終えて

「菜の花や月は東に日は西に」という蕪村の句を読んで、ドイツの学生は晩夏、秋も近づいて何やらもの寂しい菜の花畑を思い浮かべたという。ドイツでは菜の花は晩夏に咲くのだ。また、日本の夏の夜空を華やかに彩る花火は、中国では正月のものであり、メキシコやインドネシアでは独立記念日に鳴らすものなのである。気候条件や生活習慣などの文化背景が全く違う外国人に、日本語の内包する季節感を理解してもらうのはなかなか難しいことである。しかし、その第一歩は互いの文化を異文化としてとらえることなのではなかろうか。互いに当たり前だと思っていたことが当たり前ではなく、別の感じ方・別の考え方をすることもできると気がつくことである。俳句の季語は異文化理解の教材としてまことに有効であった。

また、違いは違いとして、世界中の人に共通するものも俳句にはある。子供の成長を願う親の気持ちや、美しいものに感動する心は、文化背景の違いを越えてすぐに理解しあえるのである。

17音の定型という特殊な言語文化の形式の中に人間の普遍性と個別性を見出したことはこの授業の第一の意義だったのかもしれない。

授業を受けた学生は感想を次のように書いてくれた。

「日本人と季節はとても強いかんけいがある。毎日生活の中に季節のことを考えながら、いろいろなことをやります。例えば、冬の料理と春の料理が違います。特に俳句の中に季語も大切です。今回の授業はとてもおもしろかったです。」（インドネシアの留学生）

「私はこの授業はとてもよかったですと思います。（中略）俳句を読んで意味の深いのを感じました。私はあまり授業が気にいって先々週にやった俳句をもらってきて私の部屋にかざっておきました。私が自分で書いた俳句はあまりよくありませんがこれからもどりよくしてこうじょうしてみたいです。」（メキシコの留学生）

最後に、今回の授業で学生が作った句を紹介しよう。

- 七色の世界が見えるシャボン玉 (中国人留学生)
- 渡り鳥春風つれて南から (")
- ゆっくりと畑を歩く秋の空 (ドイツ ")
- 子供たち青いプールに飛び込んで (アメリカ ")
- 雨降りのやまずこおろぎの鳴いている (インドネシア ")

- あげは蝶花から花へ飛び静か (")
- 陽炎が地面をけたてて目に浮かぶ (オーストラリア ")
- 何回もふとんをかけて母心 (中国 ")
- 夕焼けやカシュの白線日暮れの美 (インド ") カシュは花の名
- バラの花香りは人を抱きしめる (メキシコ ")

<参考文献>

- 1、外山滋比古 『日本語の論理』 (1973) 中央公論社
- 2、国立国語研究所 『日本語教育のための基本語彙調査』 (1984) 秀英出版
- 3、俳人協会編 『俳句指導の方法』 (1987) 俳人協会
- 4、上野さち子 『女性俳句の世界』 (1989) 岩波新書
- 5、鷹羽狩行 『俳句の楽しみ』 (1987) 日本放送出版協会
- 6、山本健吉編 『季寄せ』 (1973) 文芸春秋社
- 7、鷹羽狩行 『古典と現代』 (1975) 牧羊社
- 8、佐藤和夫 『俳句からHAIKUへ』 (1987) 南雲堂

(お茶の水女子大学日本語文化専攻修士2年)